

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告（4）

清外寺跡・梶岡城跡

「東児が丘マリンヒルズゴルフクラブ」
ゴルフ場建設事業に伴う発掘調査報告

1990. 3

東児が丘ゴルフ場建設事業
埋蔵文化財調査委員会

序

本報告書には、玉野市上山坂280番地ほか2140筆の通称「東児が丘」に所在した、清外寺跡・梶岡城跡の発掘調査報告を収載しました。

玉野市は現在、スペイン村・王子アルカディア構想など、リゾート計画が林立しております。その1つとして、丸田興産株式会社により東児が丘においてゴルフ場の建設事業が進められております。この東児が丘には、周知の遺跡として清外寺跡・梶岡城跡および経塚2基が存在しております。この事業に伴って、関係機関による慎重な協議の結果、清外寺跡と梶岡城跡においてはやむなく発掘調査を行って記録保存をし、経塚2基については現状保存をすることになりました。

発掘調査の結果、清外寺跡・梶岡城跡いずれに関しても確実な遺物・遺構は発見できませんでした。しかし地域的にみれば、いずれの地にもかつて遺跡が存在したと考えられます。今後、この報告書が文化財の保護、保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にあたりましては、終始東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財保護対策委員の先生方からあたたかいご指導・ご助言をいただきました。事業主の丸田興産株式会社をはじめ、工事主体者の株式会社竹中工務店および、地元有志の方々からはご援助とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

東児が丘ゴルフ場建設事業

埋蔵文化財調査委員会

委員長 信原定治

例　　言

1. 本報告書は、「東児が丘マリンヒルズゴルフクラブ」ゴルフ場建設に伴う、「^{せんげじ}清外寺^{あと}跡」・「^{かじおかじょうあと}梶岡城跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、岡山県玉野市上山坂280番地ほか2140筆の通称「東児が丘」に所在する。
3. 発掘調査は、後に記す「東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財調査委員会」が実施し、調査期間は平成元年4月3日から同年7月24日までをあてた。
4. 発掘調査および報告書作成にあたって、後に記す「東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財保護対策委員会」の先生方に貴重なご指導・ご助言を得た。記して感謝の意を表する。
5. 発掘調査にあたっては、事業主である丸田興産株式会社をはじめ、工事主体者の株式会社竹中工務店や、株式会社砂原組および地元住民の方々に多大なるご協力をいただき、記して感謝の意を表する。
6. 発掘調査にかかった経費は、すべて事業主である丸田興産株式会社の負担による。
7. 現地での発掘調査および本報告書の作成は主として、玉野市教育委員会社会教育課職員武下嘉之・宝蔵光辰が行い、上記調査委員会および対策委員会のご指導・ご助言を得た。
8. 銅銭のX線撮影にあたっては、岡山理科大学博物館課程及び講師　浜田穰氏の手を煩わせた。
また、岡山県立美術館学芸員　上西節雄氏からは、陶磁器に関して有益なるご教示を得た。記して感謝の意を表する。
9. 報告書に用いた高度値はすべて海拔である。
10. 発掘調査による遺物・写真・実測図等は、玉野市総合文化センター内の文化財収蔵庫に保管している。

本文 目 次

第1章 調査の経緯	1
第2章 位置と環境	7
第3章 調査結果	10
第4章 まとめ	19

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	8	第8図 清外寺跡上層断面図-1 (1/50)	14
第2図 遺跡位置図 (1/50,000)	8	第9図 清外寺跡土層断面図-2 (1/50)	15
第3図 遺跡位置図 (1/5,000)	9	第10図 梶岡城跡調査後地形図 (1/1,500)	16
第4図 清外寺跡調査後地形図 (1/750)	11	第11図 梶岡城跡土層断面図-1 (1/50)	17
第5図 清外寺跡東側南部石列平面図・ 側面図 (1/70)	12	第12図 梶岡城跡上層断面図-2 (1/50)	18
第6図 清外寺跡西侧南部石列平面図・ 側面図 (1/50)	13	第13図 出土遺物-1 (1/3)	19
第7図 清外寺跡東側南部石列平面図・ 側面図 (1/50)	13	第14図 出土遺物-2 (1/3)	20

図 版 目 次

図版 1 遺跡遠景写真	3 清外寺跡西側斜面
図版 2-1 清外寺跡遠景	4 梶岡城跡南部土留め
2 梶岡城跡遠景	5 胸上慈等院跡石垣及び石段
図版 3-1 清外寺跡東側南部石列	6 「寛永通宝」X線写真
2 清外寺跡東側石列	図版 4 出土遺物

第1章 調査の経緯

1986（昭和61）年12月16日、丸田興産株式会社は、玉野市上山坂280番地ほか2140等地に所在する、通称「東児が丘」におけるゴルフ場建設の計画を公表した。「東児が丘」については、すでに1968（昭和43）年3月、玉野市へ合併される以前の旧児島郡東児町当時に、株式会社興人により住宅地造成が計画されていた。この「東児が丘」には周知の遺跡が存在しており、1972（昭和47）年11月14日から73（昭和48）年3月30日まで、Ⅲ東児町教育委員会が県内研究者の応援を得て遺跡の分布調査を実施し、清外寺跡・梶岡城跡および経塚2基の存在が確認された。その後、株式会社興人はこの遺跡分布調査の成果をもとに、遺跡をできるだけ現状保存しつつ開発する予定であったが、会社の事情によりやむなく開発を中止した。このたびゴルフ場建設の計画を策定した丸田興産株式会社は、さきに実施された遺跡分布調査の結果をふまえ、1987（昭和62）年4月20日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を提出し、1987（昭和62）年7月6日、岡山県教育長・玉野市教育長・丸田興産株式会社代表取締役の3者間で「文化財保護に関する覚書」（資料1）を締結した。

この「文化財保護に関する覚書」による協議の結果、「東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財調査委員会」を設置して発掘調査が実施されることになり、1989（平成元）年4月18日付で文化財保護法第57条第1項の規定に基づく、埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。

発掘調査は、「東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財調査委員会」で発掘調査の方針について種々協議を重ね、おもに玉野市教育委員会社会教育課の担当職員があたり、1989（平成元）年4月3日から同年7月24日まで実施した。

なお、重要な遺跡の検出があった場合、その保存方法を討議する必要があると考え、「東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、1989（平成元）年5月23日および同年7月4日の2回、上記の保護対策委員会を開催して指導と助言を受けた。記して深甚の謝意を表したい。

（資料1） 事業施行に伴う文化財保護に関する覚書

岡山県教育委員会（以下「甲」という。）と玉野市教育委員会（以下「乙」という。）と丸田興産株式会社（以下「丙」という。）とは、当該事業施行地内の文化財の保護について、文化財保護法の精神にのっとり、次のとおり覚書を締結し、これを誠実に実行するものとする。

1. 事業の概要

内が実施する事業の概要は、次のとおりとする。

- (1) 事業地 木野市下山坂、上山坂、胸上、梶岡、東田井地の各地区
- (2) 事業名 東見ヶ丘カントリークラブ（仮称）ゴルフ場新設
- (3) 事業計画面積 1,314,000m²
- (4) 事業期間 昭和62年11月 日から昭和64年8月 日まで

2. 文化財保護の措置

- (1) 内は、前項の事業の実施にあたっては、文化財の破壊を防止するための最善の努力を講ずるものとし、原則として文化財は現状で保護保存するものとする。
- (2) 個々の文化財の具体的保存措置については、甲・乙と内が別途協議して決定するものとする。

3. 文化財の確認

乙は、甲と協議して文化財の確認調査を実施し、その位置及び範囲等を丙に明示するものとする。文化財の確認調査の実施にあたっては、丙は工事施行前に下草等の伐採を行うものとする。

4. 工事施工中の新発見

工事施工中またはその他の理由により新発見された文化財については、内はその現状を変更することなく、2項に準じて措置するものとする。

5. 発掘調査

- (1) 止むを得ず発掘調査が必要とされる文化財については、甲の指導により、乙又は丙が専門研究者に委託して実施するものとする。
- (2) 発掘調査および調査後の学術報告書作成に要する経費は、丙が負担するものとする。

6. 報告及び調査

甲および乙は、丙が行う事業状況について、内に対し必要な報告を求め、かつ、文化財担当職員に立入調査を行わせることができるものとする。

7. その他

この覚書に定めない事項またはこの覚書に定める事項について疑義が生じたときは、甲・乙および丙が協議のうえ定める。

以上覚書の証として、おのおの記名押印のうえその1通を保有するものとする。

東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財保護対策委員会

氏名	所属
鎌木 義昌	岡山理科大学理学部部長 (岡山県文化財保護審議会委員)
間壁 忠彦	倉敷考古館館長
三杉 兼行	甲浦郵便局局長 (岡山市文化財モニター)
水内 昌康	元岡山市立桑田中学校校長 (岡山県文化財保護審議会委員)

東児が丘ゴルフ場建設事業埋蔵文化財調査委員会

職名	氏名	所属
委員長	信原 定治	玉野市教育委員会教育長
副委員長	河野 衛 土岐 威	岡山県教育委員会文化課課長代理 玉野市教育委員会教育次長
委員	伊藤 覧 河本 清 島原 克人 柳瀬 亮彦 岩崎 増修 宵川 澄夫 名合 照亀 北村 章 木香 英昭 臼井 英治 坂木 文男 武下嘉之 宝藏 光辰	岡山県教育委員会文化課課長補佐 岡山県古代吉備文化財センター次長 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員 玉野市文化財保護委員
委員(調査員)		
監事	藤川 洋二 小西 茂平 杉原 茂	岡山県教育委員会文化課主査 玉野市教育委員会庶務課課長 丸田興産株式会社取締役
事務局長	小川 弥一郎	丸田興産株式会社取締役
事務局次長	下川 正彰	" 総務統括
事務局員	井上 節夫	玉野市教育委員会社会教育課社会教育係長

日誌抄

平成元年

- 4月3日（月） 清外寺跡 事前確認調査開始。器材搬入。N区重機による表土除去、トレンチ3ヶ所掘削。
- 4日（火） 清外寺跡 I・II区重機による表土除去。N区トレントレンチ掘削清掃、断面写真撮影、実測。
- 5日（水） 清外寺跡 N区表土除去後写真撮影、T-D掘り下げ。
- 7日（金） 清外寺跡 N区T-D清掃。
- 10日（月） 清外寺跡 N区T-E・F・G・H掘り下げ、写真撮影、T-D写真撮影。
- 11日（火） 清外寺跡 N区T-H写真撮影。N区全景写真。III区T-A掘り下げ。
- 12日（水） 清外寺跡 III区トレントレンチ掘り下げ。
- 13日（木） 清外寺跡 II・III区トレントレンチ掘り下げ。
- 14日（金） 清外寺跡 II区トレントレンチ掘り下げ。
- 17日（月） 清外寺跡 II区T-B写真撮影、T-C掘り下げ。
- 18日（火） 清外寺跡 II区T-C・D掘り下げ、T-C写真撮影。I区T-A設定。
- 19日（水） 清外寺跡 II区T-D、I区T-A掘り下げ。
- 20日（木） 清外寺跡 I区T-A・B・C掘り下げ、T-A・II区T-D写真撮影。
- 21日（金） 清外寺跡 I区T-B・C・II区T-E掘り下げ。I区T-B・C写真撮影。
- 25日（火） 清外寺跡 II区T-E・F掘り下げ。
- 26日（水） 清外寺跡 II区T-E・F写真撮影、II-A区掘り下げ。
- 27日（木） 清外寺跡 II-A区掘り下げ。
- ～ 同上
- 5月22日（月） 清外寺跡 I・II・III区トレントレンチ内清掃。
- 23日（火） 清外寺跡 第1回対策委員会。
- 24日（水） 清外寺跡 第一次調査開始。II・III区トレントレンチ掘り下げ、写真撮影。III区南側重機による掘り下げ。
- 25日（木） 清外寺跡 II区トレントレンチ掘り下げ、重機による表土掘り下げ。III区南側清掃、写真撮影。
- 26日（金） 清外寺跡 II区トレントレンチ掘り下げ、写真撮影、重機による表土掘り下げ。

- 27日（土） 清外寺跡 Ⅱ区重機による表土掘り下げ、地山清掃。
 29日（月） 清外寺跡 Ⅱ区東側側面清掃、石列検出清掃。
 30日（火） 清外寺跡 Ⅰ・Ⅱ区重機によるトレンチ掘り下げ。Ⅱ区重機による表土掘り下げ、地山清掃。
 31日（水） 清外寺跡 Ⅱ区重機による地山掘り下げ、地山清掃。
 梶岡城跡 重機によるトレンチ掘り下げ。
 6月1日（木） 清外寺跡 地山清掃。
 梶岡城跡 重機によるトレンチ掘り下げ。
 2日（金） 清外寺跡 Ⅰ・Ⅱ区トレンチ清掃。Ⅱ区北・西・東側断面写真撮影、北側断面実測。
 5日（月） 清外寺跡 Ⅱ区西側側面掘り下げ。
 6日（火） 清外寺跡 Ⅱ区西側側面重機による表土掘り下げ、北側断面除去、西・東・南側断面実測。
 7日（水） 清外寺跡 Ⅱ区西側重機による表土掘り下げ、地山清掃、北側石列写真撮影平板実測。
 8日（木） 清外寺跡 Ⅱ区西側重機による表土掘り下げ、地山清掃、東側石列写真撮影平板実測。
 12日（月） 清外寺跡 Ⅱ区南東側石列側面実測。Ⅰ区北側表土掘り下げ。
 13日（火） 清外寺跡 Ⅱ区東側石列平板実測、西側石列清掃、写真撮影。Ⅰ区北側表土掘り下げ。
 14日（水） 清外寺跡 Ⅱ区東側石列平板実測。Ⅰ区北側表土掘り下げ。
 15日（木） 清外寺跡 Ⅱ区東側石列南部清掃。Ⅰ区北側表土掘り下げ。
 19日（月） 清外寺跡 Ⅱ区東側南・南側・西側南地形平板実測。Ⅰ区北側表土掘り下げ。
 梶岡城跡 トレンチ内清掃。
 20日（火） 清外寺跡 Ⅱ区東側地形及び石列平板実測。Ⅰ区北側表土掘り下げ。Ⅲ区部分トレンチ掘り下げ写真撮影。
 梶岡城跡 トレンチ内清掃。
 21日（水） 清外寺跡 Ⅱ区西側・Ⅰ区北側地形平板実測。Ⅲ・Ⅳ区部分トレンチ掘り下げ写真撮影。
 梶岡城跡 トレンチ内清掃。
 22日（木） 清外寺跡 Ⅰ・Ⅱ区地形平板実測。清外寺跡器材撤去、梶岡城跡へ移動。
 梶岡城跡 トレンチ内清掃。

- 26日（月） 梶岡城跡 トレンチ内清掃。
～ 同 上
- 29日（木） 調査委員会
- 30日（金） 梶岡城跡 トレンチ内清掃。
- 7月4日（火） 梶岡城跡 南・北側石列検出、写真撮影。
- 5日（水） 梶岡城跡 南・北側石列検出。
- 7日（金） 梶岡城跡 南側石列検出。
～ 同 上
- 18日（火） 第2回対策委員会
- 19日（木） 梶岡城跡 南側石列検出。
清外寺跡 II区西側石列侧面実測。清外寺跡発掘調査終了。
- 20日（木） 梶岡城跡 南・北側石列写真撮影。トレンチ掘り下げ。
- 21日（金） 梶岡城跡 トレンチ内清掃、写真撮影。
- 24日（月） 梶岡城跡 南北断面（A～A'、B～B'）実測。器材撤去。梶岡城跡発掘調査終了。

第2章 位置と環境

清外寺跡と梶岡城跡の所在する玉野市は、岡山県の南端部中央、児島半島南部に位置し、東西に長く、南は瀬戸内海をへだてて香川県香川郡直島町および香川県高松市、北は児島湖をへだてて岡山市、西は倉敷市とそれぞれ接している。

玉野市内には先土器時代から中世にかけてのさまざまな遺跡が確認され、一部調査報告もなされている。これらの中で、「宮田山ナイフ形石器」として知られている先土器時代のナイフ形石器が採集された「宮田山遺跡」(注1)、縄文時代早期の押型文土器片やサスカイト製の石器の確認された「波張崎貝塚」(注2)、弥生時代中期の高地性集落遺跡の「的場山遺跡」(注3)、岡山市との境に位置する同じく弥生時代中期の高地性集落遺跡の「貝殻山貝塚」(注4)、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡で、畿内の初期土師器によく見られる叩き目を施した上器が多數出土した「深山遺跡」(注5)、古墳時代前期ごろの古墳が点在する莊内平野に存在する竪古墳群のうちの「滝・鐘錘場1号墳」(注6)、古墳時代および平安時代から鎌倉時代にかけての製塩遺跡である「沖須賀遺跡」(注7)、中世の山城である「常山城跡」(注8)などの遺跡が代表的なものである。

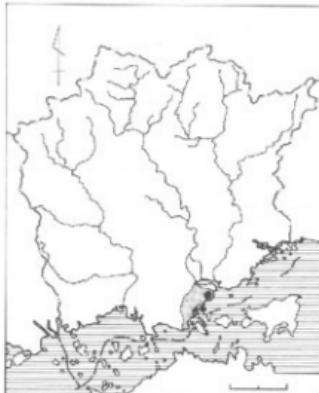
さて、このような歴史的環境のなかにある清外寺跡と梶岡城跡は、児島半島南端の瀬戸内海に面する通称「東児が丘」に位置している。東児が丘は1973(昭和48)年に玉野市に合併した旧東児町内の、胸上・梶岡・下山坂・上山坂の4地区にまたがる海拔約75mのなだらかな丘陵である。周囲の眺望はよく、周辺の集落が見下ろされ、とくに南の視界を大きく占める瀬戸内海の眺望は素晴らしい。北には下山坂の集落をはさんで貝殻山、北西には上山坂の集落をはさんで金甲山を見上げる。旧東児町域内に現存する寺院としては、番田に円山阿弥陀寺明王院、北方に真福山藥工寺中藏院・横尾山千柱寺理泉院、上山坂に林松山常光寺福寿院、胸上に三宝院、東田井地に東岳山松園寺竈乘院、梶岡に長尾山正法寺常楽院・大師堂などがあり、その他にも仏堂が多數存在する(注9)。さらに廃寺跡としては、西田井地に東光寺跡・西福寺跡・慈眼寺跡・常泉寺跡・相坂山清水寺跡・西蘿山尼崎寺跡、下山坂に向山船積寺跡が知られており、とくに、胸上の医王山藥王寺慈等院と南海山称名寺吉祥院および宮尾山神宮寺地蔵院の二か寺が1941(昭和16)年に合併して「三宝院」となり、かつての地蔵院の地に現存している(注10)。このようにかつては狭い東児馬込地域にかなりの数の寺院があったが、寛文年間の廃寺政策によって淘汰され、現在の寺院が残ったと思われる。

玉野市内には前述の常山城跡を含めて大小約40の城跡が確認、あるいは伝承されている。そ

れらの中で、旧東児町域内においては、上山坂の高畠城跡、下山坂の丸山城跡、番田の番田城跡・相引城跡、胸上の胸上城跡、西田井地の矢の端陣屋跡、東田井地の屋敷山、岡山市との境に位置する貝殻山の山城など、梶岡城跡を含めて12の城跡が伝え残されている（注11）。

なお東児が丘は全域が散布地とされており（注12）、西に縄文時代早期の押型文土器片やサスカイト製の石器の確認された波張崎、南西には縄文時代早期の押型文土器及び古墳の確認された大入崎（注13）、北に弥生時代中期の高地性集落遺跡の確認された貝殻山、また東児が丘と貝殻山の中間に位置する北方・下山坂地区の水田には、条里制（注14）の跡が認められる。さらに児島半島には「児島屯倉」（注15）があったとされているなど、さまざまな遺跡にかこまれていることから、寺跡や城跡のほかにも遺跡の存在が予想される。

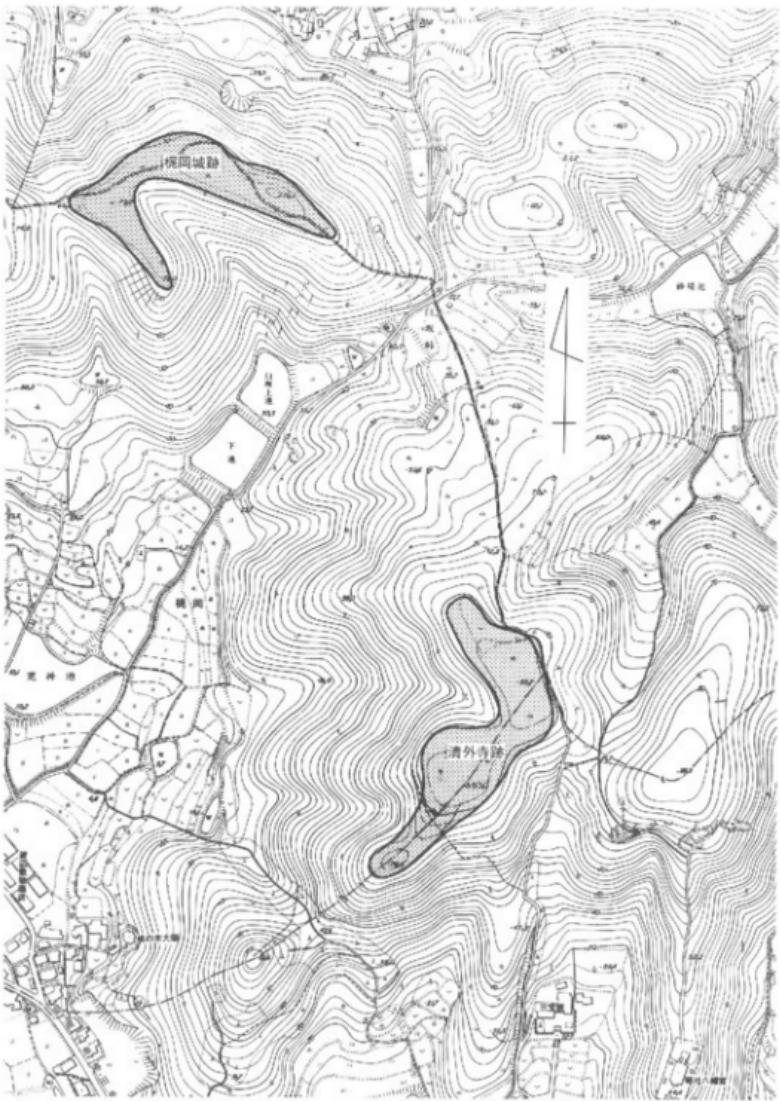
また、東児地区においては平地が希少であり耕地が少ないため、かつては山を開墾し、山頂まで段々畑が続いている状況である。そのため東児が丘については、遺跡の範囲やその性格を明らかにする必要にせまられていた。



第1図 遺跡位置図（黒印）



第2図 遺跡位置図（黒印）(1/50,000)



第3図 遺跡位置図 (1/5,000)

第3章 調査結果

せんげじあと 清外寺跡

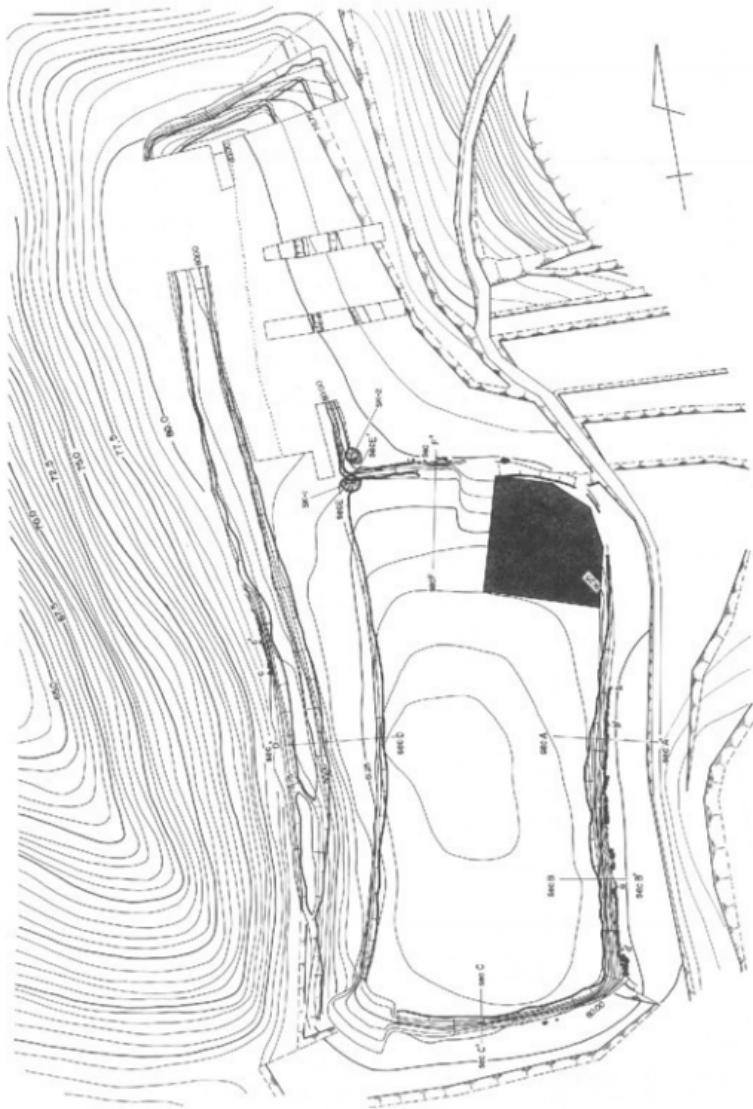
清外寺跡は、南に瀬戸内海をはさんで四国が一望でき、南西に石島、南東に豊島を望み、北に梶岡城跡、北々西に貝殻山を望む。

主要な伽藍の伝承地は4ヶ所の平坦面にわかれしており、便宜上北からⅠ～Ⅳ区とした。Ⅰ・Ⅱ区はほぼ南北方向、Ⅲ・Ⅳ区はほぼ北東ないし南北方向に伸びるなどらかな丘陵上に立地している。なおⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の海拔高は約80m、同じくⅣ区は約75m。尾根幅は約50～20m。平坦部の面積は約11,000m²で、うちⅠ区は約2,400m²、Ⅱ区は約5,000m²、Ⅲ区は約2,000m²、Ⅳ区は約1,600m²である。清外寺の寺域であったと思われる範囲は、胸上・梶岡・下山坂の3地区にまたがり、胸上地区には鐘突堂・清外寺坂・清外寺坂西上・坊ノ谷などの小字名がみられ、さらに梶岡地区および下山坂地区にも清外寺がみられ、寺とゆかりの深い小字名が残されている。また発掘調査を実施したⅣ区の南西約100mの尾根続きに、深い鞍部をへだてて経塚山と呼ばれる小高い山がある。この山は、1879（明治12）年の『胸上村誌』によれば、当時から周辺の村民の墓地になっており、現在もふもとから山頂にかけて墓所が広がっている。この経塚山をふくめ周辺に西経塚・経塚下・当光坊の3ヶ所の小字名が見え、清外寺に深く関連するものと思われる。こうした字名の広く散見できるなかにあって、清外寺の中心部は大字胸上・小字清外寺坂西上および鐘突堂であろうと推察できる。

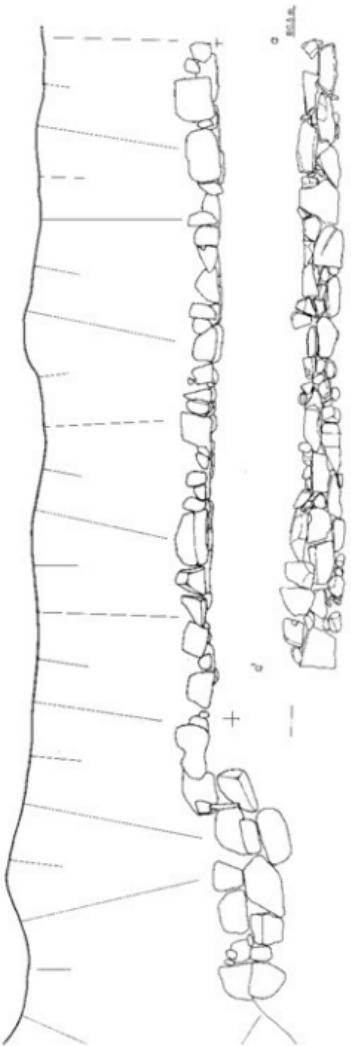
しかしながら、周辺は丘陵の斜面に至るまで1965（昭和40）年代まで畑作が営まれ、段々畑の跡が残っており、かつての清外寺の基壇造成によるものか、あるいは段々畑の跡であるのか判断しかねる現状であった。

そこで、確認調査としてⅠ区に幅約2m、長さ約6m～16mのトレンチを5本、同規模のトレンチをそれぞれⅡ区に8本、Ⅲ区に3本、Ⅳ区に7本設定した。その結果、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区からは何も遺構は検出できず、また遺物に関しても近代の陶器器が数点出土したのみにとどまった。とくにⅢ区の南側3分の1については入念に地山向まで数度にわたって検出手を下げたが、特記すべき遺構を検出することはできなかった。

Ⅱ区に関しては、調査前から基壇と思われる側面に石垣らしいものが露出しており、トレンチを設定した結果、東・北・西部に石列が看取できた。トレンチ調査にしたがって、石列の全面検出と上部平坦面を全面にわたって検出を試みたところ、東側では、長さ約39m、高さ約60～20cmの石列を確認できた。東側の石列においては、南半部が一辺約20～40cmの割り石であ



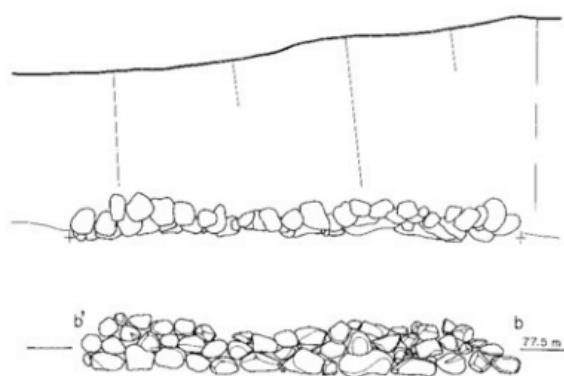
第4図 清外寺跡調査後地形図(1/750)



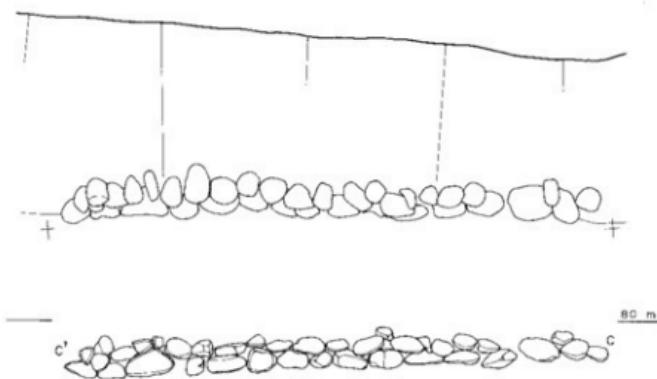
第5図 清外寺跡東側南部石列
平面図・側面図 (1/70)

るのに対して、北半部は拳大ないし人頭大の河原石である。これらの河原石は、この一帯に山砂利層が広がっており、そこから採集してきたものと思われる。北側は長さ約10m、高さ約20cmを認め、西半部が割り石、東半部が河原石であることが判明した。西側においては長さ約9m、高さ約50~30cmであり、すべて拳大ないし人頭大の河原石であった。南側においては、石垣の崩れた跡と思われる一辺約20~40cmの石を2個検出したにとどまる。南側をのぞいてそれぞれ地山に接しており、一部地山を整形して設置したかなり丁寧な作りであったが、何のための石列であるのか判明しなかった。また基壇と思われる側面に露出していた石は、一辺が約40cmの割り石で、約7mの長さに9個あるが、地山に接しておらず表土中にあり、また何らの規則性もみられなかつたので、上から崩れたものではないかと思われる。上部平坦面においては遺構は検出できなかった。

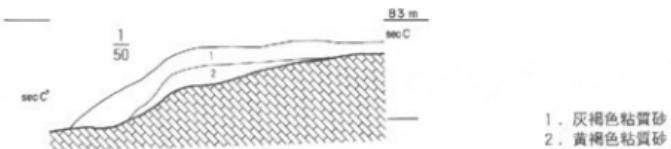
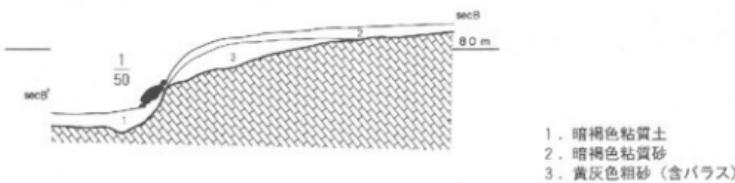
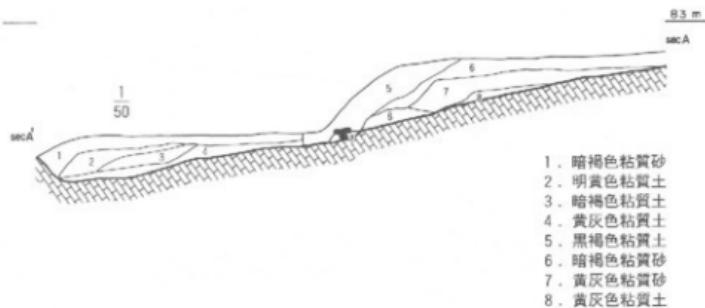
出土遺物に関しては、土質小皿片数点、備前焼鉢片数点、近代備前焼小片数点、近世白磁器および青磁器小片数点、近世~近代陶磁器小片相当数が出土している。なお、銅錢一点が出土しており、当初、腐食により文字は判読できなかったが、その後X線撮影により「寛永通宝」であることが判明した。銅錢を除いていすれの遺物も細かく打ち砕かれており、完形のものは1点もなかった。平坦部においても、礎石・雨落溝その他の遺構も皆無で、遺物もかなり小さいものまで残されていないことと考え合わせ、新たに建立した寺院へと移されたのではないかと推察される。



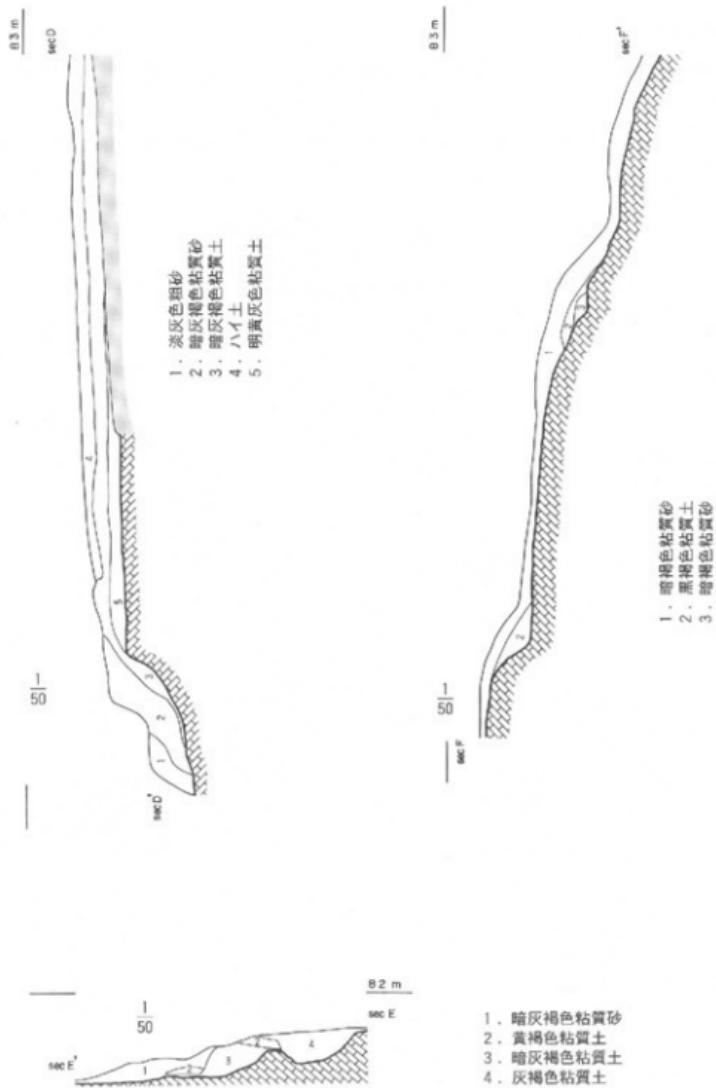
第6図 清外寺跡西側南部石列平面図・側面図 (1/50)



第7図 清外寺跡東側南部石列平面図・側面図 (1/50)



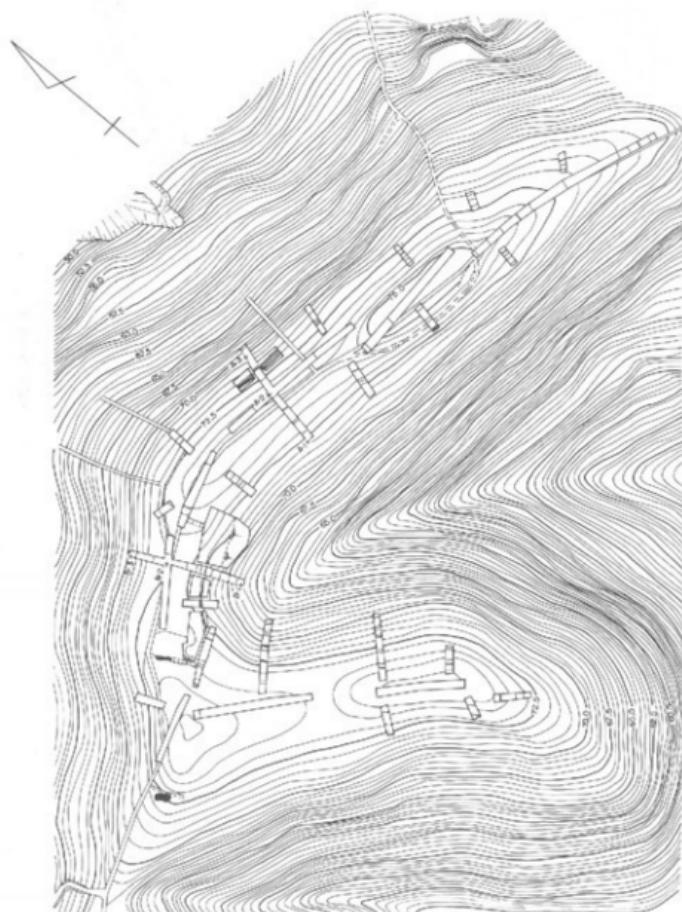
第 8 図



第9図

かじおかじょうあと
梶岡城跡

梶岡城跡は北々西に貝殻山、北西に高畠城跡をはさんで金甲山、南に清外寺跡を望む周囲の眺望がよい、海拔高約75m前後のなだらかな丘陵上に位置し、大字梶岡小字白板・大字下山坂小字向山および西向山にまたがっており、これらを合わせた総面積は約19,200m²である。先学

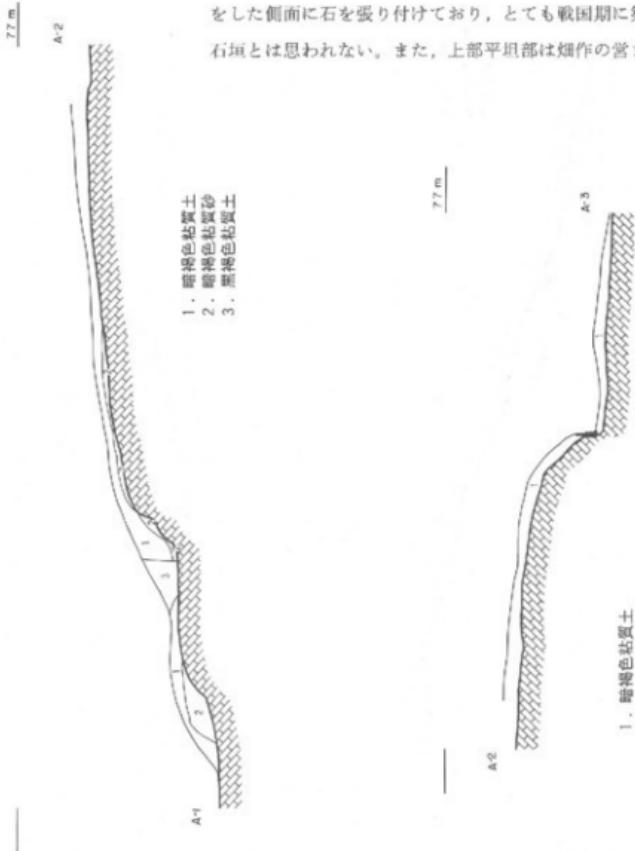


第10図 梶岡城跡調査後地形図 (1/1,500)

による城跡との想定は、小字名の「白坂」をもって、城跡の転化したものと見なしたのかもしれない。

当地は、本対策委員の三杉兼行氏や地元住民の話によると、1965（昭和40）年代まで畑作が営まれていたということで、東面および南面の一部に今でも段々畑の跡がみられる。

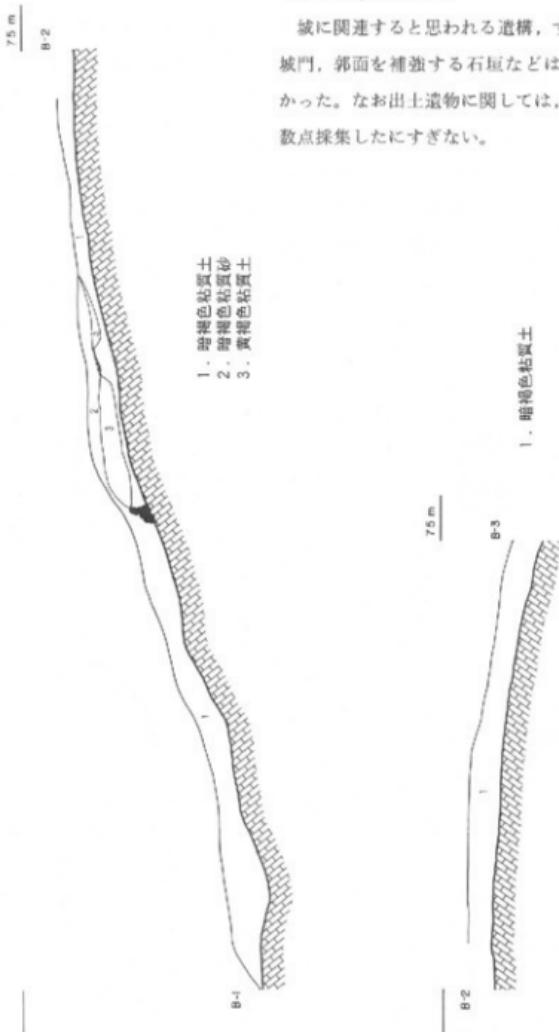
確認調査として、地形にそって幅約2m、長さ5~60mのトレンチを31本設定した。確認調査の結果、北面、東面、南面のそれぞれ一部に石列が確認できた。これらの石列は全て拳大ないし人頭大の比較的小さい河原石である。東面と南面は段々畑と位置が同じであり、東面は段の側面に張り付けられており2段ある。また、南面の石列は盛り土をした側面に石を張り付けており、とても戦国期に築かれた強固な石垣とは思われない。また、上部平坦部は畑作の営まれていた面で



第11図

あり、北面の石列もこうした畠地の土留め用のものであると考えられる。

城に関連すると思われる遺構、すなわち城井戸や城門、郭面を補強する石垣などは一切検出されなかった。なお出土遺物に関しては、近代陶磁器片を数点採集したにすぎない。



第12図

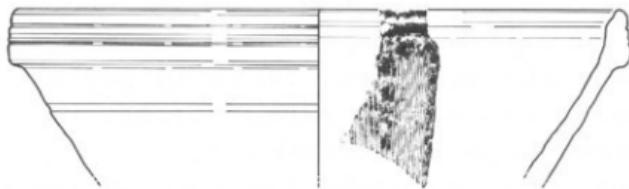
第4章 まとめ

清外寺跡

清外寺跡においては、当初から丘陵頂部に平坦面が残っており、遺構の発見が期待されたが、調査の結果平坦面の裾部においてわずかな石列が確認されたのみにとどまった。しかし発掘調査範囲のⅠ・Ⅱ区の地形が比較的平坦面を残していること、検出された石列のうち約半数が割り石を使用しており、これらが他のものに使用されていたものの転用と考えられること、周囲の眺望がよく、また下山坂・上山坂・桜岡・胸上といった東児の集落に囲まれている通称「東児が丘」に立地し、桜岡・胸上のすぐ背後地に主要な伽藍の伝承地が存在すると推定されること、さらに清外寺が存在したことを決定的なものとする字名が残っていることなどの状況から推して、清外寺が存在した可能性のある環境が残されていると思われる。

遺物実測の状況

1. 描鉢の口縁部であり、推定口径は約32cmを測る。器壁は内面、外面ともに横ナデがほど



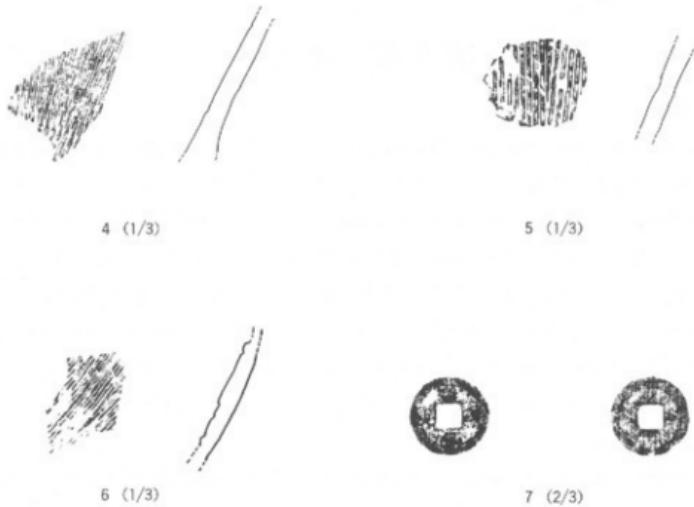
1 (1/3)



3 (1/3)

2 (1/3)

第13図 出土遺物—1 (1/3)



第14図 出土遺物－2 (1/3)

こされ、内面は、比較的丁寧な横ナデ調整後に、1単位9本の条線が放射状に深くつけられている。口縁部はほぼ直立し、外部には2本の条線が周囲を巡っていると思われる。色調は明赤茶色で、堅緻な焼成であるが、大粒の砂粒をわずかに含んでいる。

2. 土師質の小皿である。推定口径は約8cm、器高は約1.5cm、推定底部径は約6cmを測る。器壁は内面、外面ともに横ナデがほどこされ、外面の底部には箝切痕跡が認められる。色調は淡黄褐色で、良好な焼成であり、細かい砂粒を含んでいる。

3. 同じく土師質の小皿である。推定口径は約7cm、器高は約0.8cm、推定底部径は約5cmを測る。摩滅が激しく、横ナデ跡などはすでに認められない。色調は赤褐色で、焼成はやや不良であり、非常に細かい砂粒を含んでいる。

1の描鉢口縁部片および4・5・6描鉢片は、18世紀後半以降と推定される。

2・3土師質の小皿は、15~16世紀以降のものと推定される。

7の銅銭は腐食がはげしく、清掃後観察したが、文字は判読できなかった。そこで、岡山理科大学にX線撮影を依頼したところ、「寛永通宝」であることが判明した。

ほかに伊万里系染め付け碗小片が40数片、白磁器および青磁器小片がそれぞれ10数片、陶器小片が20数片出土しているが、いずれも19世紀のものと思われる。

『慈等院縁起』

延享三丙寅正月吉辰

○慈等院縁起

三宝院

抑當寺者聖武皇帝之御宇、天平年中菩提僧正之開基、本尊御長丈尺二寸之藥師如米也、則春日作ト云々、右藥師如來、自是當西有高山、則云甲之峯、往昔大伽藍有、彼山干愛有火災、此日彼本尊飛行不見給、邑經塚山而夜々光明滿峯、照海上赫々乎、塚里人至塚山、則見此本尊、為希有ノ思、忽疑信心者多、其頃有西壁小寺、号東光坊而安置此寺為本尊、祈病患靈驗甚多、故皆人瞻仰焉也、其后経四百六十余年、後白川法皇、保元年中ニ以東光坊移入郷内、則改号医王山藥王寺慈等院、其後中絕、至寶徳年中増畔僧正中興ニテ、右寺跡山林等当寺之支配、明鏡者与千、誠往古縁起虽有之、火災之日反焼失之由、俚謬申伝若也

自天平年中至今、宝曆十三年一千百十七年成、慈等院号
自其已後數百年相続至于今

『慈等院縁起』と伝えられる文書が現在三宝院に所蔵されている。これはあくまでも縁起であり、直接清外寺の記述ではないが、『慈等院縁起』中の東光坊とは現在の当光坊と推定され、位置的に清外寺跡に近いこともあり、清外寺との関連が考えられる。

また三宝院は現在、鎌倉時代のものと伝えられる不動明王像と、いずれも室町時代のものと伝えられる阿弥陀如来像、延命地蔵像および弘法人師両像を所蔵している。

さらに三宝院は、薬師如来が本尊である。年代は判明していないが、『慈等院縁起』に記述されている薬師如来と体長が同じであることからも、同一の物である可能性が高い。

金甲山と清外寺跡は直線距離で約4.3kmであり、清外寺跡から金甲山がよく見上げられることからも、『慈等院縁起』から推察するに、清外寺は、もともと金甲山山頂に存在したと思われる寺院の末寺的な何らかの関係をもつものであり、金甲山山頂寺院の火災による焼失により、関係の深い清外寺へ本尊が移されたのであろう。ただ、出土遺物から清外寺が存在したのは、19世紀ごろであると思われる。しかし、数片ながら土師質の小皿が出上したことにより、室町時代まで開基がさかのぼる可能性も、まったく否定することはできない。後年、清外寺が衰退するに従って、上記の仏像、仏画や使用品などとともに新たに建立された慈等院に、さらに三宝

院に移されたが、清外寺は人々から忘れ去られ、字名が残るのみとなっているのではないか、と推考される。

梶岡城跡

梶岡城跡においては、調査以前から丘陵の尾根を削平して、平坦面を作りだしていると思われたが、事前調査の結果、城に関連すると思われる遺構は検出されなかった。

しかし梶岡城跡は、白坂峠と呼ばれる梶岡村・胸上村・下山坂村・鉢立村を結ぶ古来からの主要路にそっていること、梶岡城跡の北に位置する高昌城跡と、直線距離で約700mと近いことなどから、おそらく高昌城と何らかの関係を持つ、戦国期の見張り用の警備度のものがあった可能性も、否定できない。

(注1) 西川宏・杉野文一「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』第3集 1959年

(注2) 平井勝「玉野市波張崎遺跡確認調査報告」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(1)玉野市教育委員会 1980年

(注3) 佐藤美津夫「児島郡口比町の堀山遺跡(略報)」『古備考古』第37号 1938年

(注4) 近藤義郎・小野昭「岡山県貝殻山遺跡」「高地性集落跡の研究」資料編 学生社 1979年

(注5) 間壁忠彦「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 倉敷考古館 1969年

(注6) 平井泰男「玉野市篠・鰐鈎場1号墳」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 玉野市教育委員会 1989年

(注7) 福田正繼「沖須賀遺跡」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 岡山県玉野市文化財保存会 1981年

(注8) 岡本寛久「常山城発掘調査報告」『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 玉野市教育委員会 1980年

(注9) 「宗教(寺院と仏堂)」『東児町史』東児町役場 1974年

(注10) 「名勝・史跡・社寺建築(社寺跡)」『東児町史』東児町役場 1974年

(注11) 多和和彦氏のご教示による。

(注12) 『玉野市文化財地図』1975年による。

(注13) 「天然記念物と文化財(文化財)」『東児町史』東児町役場 1974年

(注14) 「天然記念物と文化財(奈良平安時代の旧跡)」「名勝・史跡・社寺建築(条里制・城跡など)」『東児町史』東児町役場 1974年

(注15) 「第2編古代 第2章飛鳥時代 第1節記紀と児島」『玉野市史』玉野市史編纂委員会 1970年

図版 1



景 遠

図版 2



1. 清外寺跡遠景 梶岡城跡から南を望む。



2. 梶岡城跡遠景 清外寺跡から北を望む。背後は貝殻山

図版 3



1. 清外寺跡東側南端部石列 北から



4. 梶岡城跡南部土留め 西から



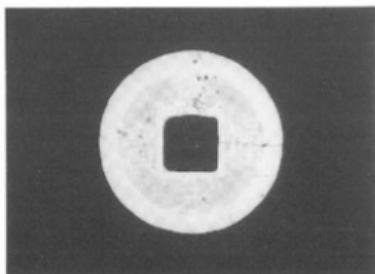
2. 清外寺跡東側石列 南から



5. 胸上慈等院跡石垣及び石段 南から



3. 清外寺跡西側斜面 南から

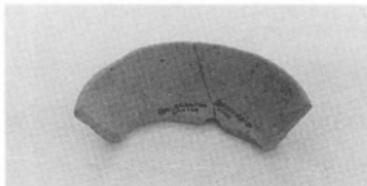


6. 「寛永通宝」X線写真

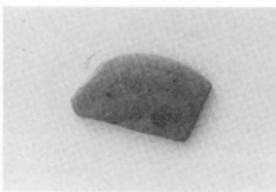
図版 4



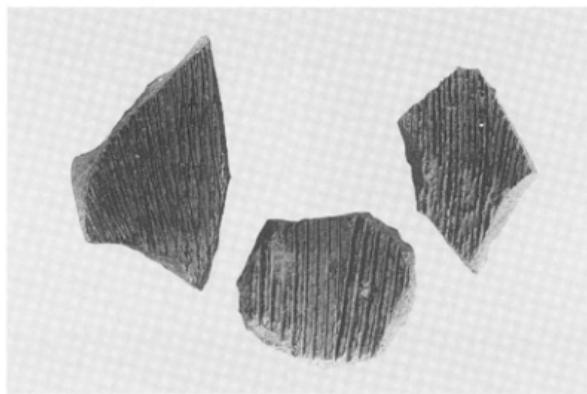
1



2



3



4・5・6



7 表



7 裏

玉野市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

清外寺跡・梶岡城跡

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月30日 発行

編集 玉野市教育委員会
発行 東児が丘ゴルフ場建設事業
埋蔵文化財調査委員会
印刷 西日本法規出版株式会社

